

時代精神の「脱・ガラパゴス化」を

Avoiding the Galapagosization of Japan's *Zeitgeist*

Goro KOIDE **小出五郎** 科学ジャーナリスト



NHK テレビ画面から

時代精神という言葉がある。ある時代を代表する価値観、あるいは社会の共通知と言ってもよいと思う。

科学技術は、時代精神と無縁ではない。むしろ時代精神の影響を受けて進化してきたし、これからも進化するだろう。もし時代精神を無視、軽視し、進化の方向の見極めを誤ると、特異な進化をしてしまうことになる。

ダーウィンの「ビーグル号航海記」で有名になったガラパゴス諸島は、他に例のない生物相がある。大陸から1,000 kmも離れた太平洋上という隔絶した自然条件の中で起きた進化の結果で、他の地域との共通性は薄い。

科学技術は共通性に意味がある。ガラパゴス化した科学技術は、世界の主流にはなり難い。

テレビは何を伝えて来たか

NHK アーカイブスという番組がある。NHKには膨大な番組の蓄積があるが、その中から話題性のある秀作を選び、ゲストによる今日的な意義の短い解説をつけて放送するものだ。総合テレビで不定期に電波に乗せている。

2011年の11月から12月にかけて、4回にわたって「原子力シリーズ」を放送した。もちろんフクシマに関連した企画である。保存されている原子力関連番組は控えめに見ても1,300本はある。その中から代表作を選び出すのはかなり目の疲れる難事業だったが、9月頃にプロジェクトチームをつくり、私もOBながら参加した。放送時の番組進行は桜井洋子キャスター、解説は私が担当した。

1回目は、1981年7月放送のNHK特集「秘められた巨大技術」の3回シリーズから、「(1)これが原子炉だ」、「(2)「安全」はどこまで」を取り上げた。1979年のアメリカのスリーマイル島事故を受けて、ブラックボックスだった原子力をできるだけわかりやすく視聴者に見てもらおうという姿勢のはっきりした番組で、いま観ても30年前制作という時間差を感じない。

2回目は、同年8月に、上記のシリーズの好評を受

けて制作されたNHK特集「いま原子力を考える」。推進派と批判派を代表する論客二人が論争する番組だった。推進派代表は、当時原子力産業会議専務理事だった森一久さん、批判派代表は大阪大学講師だった久米三四郎さん。二人とも故人である。白熱の真面目な討論を展開したが、クールに本質をついた議論は今でも十分通用する内容だった。

3回目は、1986年9月のNHK特集「調査報告チェルノブイリ原発事故」。旧ソ連でレベル7の原発事故が発生したのはこの年の4月。その直後にヨーロッパ各地の汚染状況を記録した番組である。昨年11月11日から13日まで市民が主催する「ふくしま会議」に招かれて来日したベラルーシの医師、ジミナ・ナジェージダさんのインタビューを含めて放送した。

4回目は、1995年放送のNHKスペシャル「地球核汚染」。広島長崎だけではなく、核兵器を製造したアメリカのハンフォード、旧ソ連のマヤーク、核実験をしたマーシャル諸島、原発事故のチェルノブイリ…と、地球は核汚染されているという現実を見据えようと訴え、広島名誉市民の故バーバラ・レイノルズさんの「I am also a Hibakusha」という言葉で締めくくった。

番組のメッセージと影響力の落差

フクシマの影響はどこまで広がるのか、どこまで深いのか、いつまで続くのか。私たちは歴史上類のない状況に直面している。

マスコミは原子力推進の一翼を担ってきた。確かにそれを否定することはできないが、それでも保存されている番組を検証していくうちに、ジャーナリズムの役割を踏まえて、原子力神話に対して的確な問題提起をするなど、かなり健闘してきたことに気がついた。迂闊な話だが、発見に近い感じだった。事実、各番組には放送後に視聴者から共感の反響が大量に寄せられている。番組でなされた「原子力批判」に対する激励も少なくなかった。

しかし、もう1つの発見は、反響の大きさに比べて影響力がほとんどなかったことである。30年前の番組

英訳版は140ページをご参照下さい。English version, see pp 140.

の原子力批判が現在も通用することに、それがよく現れている。つまり、番組の影響力は瞬間的ですぐに忘れ去られてしまったのである。

これをどう考えたらいいのだろうか。

フクシマで、「I am also a Hibakusha」を超えて「We are also Hibakusha」が現実になった。その現実の重さが胸に突き刺さる。「日本は唯一の被爆国」「核廃絶は日本人の倫理」と、あたかも枕詞のように使われてきたが、言葉だけに終わっていたようだ。原発拡大路線をまっしぐらに走って来たし、アメリカの核の傘の下に安住してきた。言葉と意識の間に大きなずれがある。言葉は理想とみなし、意識は現実を追認する。この言葉と意識のずれを克服するには知識が必要だが、その知識が十分でなかった。フクシマは、私たちのその弱点を露わにしたのではないだろうか。

番組を放送したときの反響は、「建て前と本音は違う」「批判は批判、現実が現実」と妙に納得してしまう考え方の渦に巻き込まれて、あっけなく消えてしまったように思う。そのために、原子力の選択について議論をするという、民主主義社会が本来想定している行動にはつながらなかったのだろう。

時代精神の進化

蔵書を整理していたら、「成長の限界」という1冊が出てきた。出版は40年ほど前の1972年。1968年に、ローマクラブが発した「環境汚染と人口増加が人類の生存の危機になりつつある」という警告をきっかけに、ドネラ・メドウス、デニス・メドウス、ヨルゲン・ランダースが著した未来予測である。

「成長の限界」はベストセラーになった。人類による資源大量消費の経済はすでに限界を超えている、やがて地球の容量を超え経済は縮小に向かう、このことを踏まえて今からすぐに経済社会をつくり直さなければならぬ。

現在では当たり前の指摘だが、当時は斬新な未来予測であった。大切なことは、「成長の限界」が指摘する内容が真剣に受け止められて、経済社会の基本構造を変える必要があるという気運が生まれたことである。これが社会の共通知、共有する価値観として進化し、時代精神に成長していった。

その後、考え方を共有する言葉が次々に登場する。

「等身大の技術」は、万一破たんしても人間のコントロール不能を招くことのない技術。「予防原則」は、予想されるリスクに対しあらかじめ対策を考えておく原則。「汚染者負担原則」は、汚染の発生源が責任を負い、負える範囲で事業を行う原則。「持続可能な経済」は、地球の資源は現世代だけのものではなく、子々孫々の生活に現世代が責任を持つ経済。その他数えれ



NHK テレビ画面から

ばキリがない。

グローバリゼーションというアメリカ発の市場原理主義が世界を席卷し、競争主義や無節操なマネーゲームが格差を生んできた一方で、主にヨーロッパ諸国でこうした時代精神は社会の底流になっていた。フクシマの経験からすぐに脱原発へ、急転換したように見えるが、決してそうではない。経済社会再生を目指す時代精神の底流が脈々と続いてきたことの結果なのである。

脱・ガラパゴス化に努めよう

日本ではどうか？

世界の共通知、共有する価値観、時代精神から外れたガラパゴス的な進化をしているのではないだろうか。

地球温暖化防止の目標は省エネルギー社会の実現にある。ところが私たちの国は、原発の新增設に風が吹いたと受け止めた。原発ができれば二酸化炭素削減につながるという旗が振られ、原発推進に拍車がかかった。しかし実際は、原発の増加に比例するように、二酸化炭素排出の増加は1990年比で約束した削減分を加えると10%をはるかに超えている。機器の省エネ技術は進んでいるが、省エネ型の社会構造を実現する点で、世界が共有する時代精神からガラパゴス諸島並みに隔絶している。

なぜなのか。

1つには圧倒的な現実優先。「国際競争力が大切」、「日本は資源がない国」と、そう口に出した瞬間に思考を停止する。もう1つは無謬主義。これは官主導の国だからこそだが、過去の決定は絶対に間違っていないことを前提とする。決めたことには後戻りがないから、旧時代の精神をひきずったまま思考停止、判断停止、行動停止。そのまま立ち往生に至る。

科学技術に携わる人は、時代精神を受け止める感度の良いアンテナを持つように努め、その進化にもっと忠実でありたい。ガラパゴス化してはならないのだ。

© 2012 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会の委員の執筆によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として認め掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetu@chemistry.or.jp